

厳冬期南アルプス

三つの縦走

第一部 '74南アルプス荒川三山

赤石岳、正月行

ダイナモ 萩野 哲

初めての冬山です。前回の十一月の偵察山行にも雪がだいぶあったが、本番はもつとすごい積雪ではないかな、山に登り始めて今回が三回目の縦走なので心細いし、僕は体力には自信がないので早々とバテそう。今年もあと三日で暮れる。

寮を朝七時に車で出発、畑羅ダムに正午過ぎに着く、偵察山行の時は車で樫島の近くまで行けたが、林道が閉鎖されていたので、林道を歩くことになった。この林道が長いので中の宿の小屋に着く頃には暗くなってきた。荷が重いので歩くのが遅くなるがしかたない。今日はこの小屋泊り、明日の行程は長いので早めに寝る朝三時半に起きる。寝むいので目がしょぼしょぼするが歩き出せば直ると思う。うす暗いのもうすぐ夜明けだ。この林道からは日の出が見えず、知らぬ間に明るくなってきた。樫島からいよいよ千枚岳への登りに取り掛かる。前回はワラビの段への登りをトラバースしてしまい沢に入ってしまった沢の急斜面をヤブコギをしてたいへん苦労した所だ。今回は慎重にワラビの段から屋根に続く登山道を進む。途中、ロボット（気象用）の電線が張ってある。いよいよ千枚小屋に近くなるに従って積雪量が多くなってきた。

トレールもなくなり腰まで、もぐるラッセルになる。吹き留りに入り込むと抜け出すのも困難だ。小屋の手前のピークに登るのがたいへんなラッセルになってしまった。下山時にはこのピークは登らず、山腹をトラバースをしていた。夕方六時暗くなりランプをつけ進むが今日中には小屋に着くのがむずかしいので今夜はここでピバークすることにする。雪をふみ固め一メートル四方の場所を確保、頭からすっぽりツェルトをかぶり夕食をすまし、することもないので寝る。下が雪のせいで体温で溶けた水がシュラフにしみ込むが寝がえりも狭いので出来ず知らぬ間に寝てしまった翌日はちよつとの時間で千枚小屋に着いてしまった。小屋を出るのも厭なので今日一日は小屋泊りにして大みそかを過ぎた。

七十四年元旦朝一時に起きる。小屋発三時半、ランプの明りを頼りに千枚岳への樹林帯を進む。今朝は昨日一日小屋でなにもしないでゴロゴロしていたので体の調子は良い。千枚岳頂上に五時に着く、日の出まで三十分以上もあるし、風も強いのでツェルトをかぶり、太陽の昇るのを待つ。ツェルトの中でアイゼンの先が邪魔なので強風のためにツェルトに穴を開けそう、ひやひやの連続である。富士山の石よりの御来光、二八八〇米の千枚岳の頂上生まれて初めての山頂での日の出である。暗い静かなシルエットの山々の中に光の輪が広がり暗い空から青い空に真っ赤に燃え上がる赤石岳の荘厳な玄明け、周りの山々が徐々に赤ピンク、橙色、白い雪へと変化する。感激の一瞬が過ぎる：：。そろそろ出発荒川東岳、中岳とやせた岩稜をアイゼンをきかし、上り下りの連続で千枚小屋から九時間程で荒川小屋に着く。昼に着いたので、赤石岳まで行こうと思ったが、時間も一杯なので中止する。天気

も良く、屋間から小屋の周りで炊事用の水を作る為、コンロで雪を解かし水を作り始めたがなかなか雪が解けず燃料を多く使い過ぎ、残りのガソリンがなくなってきた。心配になってきた。

小屋は十二〜三人で満員になったので後から来た人達はスペースが狭くなつてしまった。登山者の中には、毎年正月に赤石岳に登つていきますと言う単独行者や転付峠から来たと言う東京からの人達で話し相手も出来た。それに天候はズット快々晴で夏の暑さと思われる暖かさである。夕方、小屋の前から富士山を写真にパチリ、仲々良く取れている。夕食の仕度に各所でコンロのシューシューと音をさせてうまさうない香いがただよってくる。

しかし我々の夕食は相変わらずである。夜はすぐにやつて来て、寒さは一段と強まる。今沸かした紅茶も少し置いておくと表面に氷が張ってくる。夕食後デザートにプリンを食べて寝る。

翌朝、起床四時半、今日は赤石岳に登ってくるだけ、小屋を出発して二時間程で赤石岳山頂に着く。ここからの展望は三千二百二十米の頂だきはある、北、中央アルプス、南アルプスの白い山脈がえんえんと続いており、さすが冬の三千米峰の頂きだと思ふ。しかし風も強く記念写真をピッケルを雪に突き刺しポーズを取りパチリとり長居は無用、荒川小屋にもどる。途中陽も上がり雪に陽が反射してまぶしいような暑さ、小屋にトラバースしている所は雪が解けハイマツがあらわれていた。屋前に小屋に着いたので熱いラーメンを作り食べ、今日もこの小屋泊りなのでシュラフを干したり、昼寝をしたり：：。翌日は下山を開始する。前偵察行の時は小赤石岳からラクダの背を樫島に降りたが、今回は雪も多クラクダの背を降りることは困難と思ひ千枚小屋に荷を置いて

きたので、ラクダの背を降りる訳にはいかず千枚小屋から樫島に降りることとする。小屋から荒川前岳の雪面をトラバースしている時、ライチョウの「グウワー」と言う鳴き声が近くでした。空はまだ暗くランプの灯ではどこに居るのがわからなかった。登りにラッセルで苦勞した箇所も後から入山した人が多いのか、立派なトレールが着けられており歩行のスピードも上り、夕暮れ時には、入山した時最初に泊つた中の宿の小屋に着くことが出来た。今日は十三時間ズット歩きづくめなので、体中がクタクタ、明日一月四日は赤石温泉ロッヂに泊り、風呂に入り、冷たいビールで乾杯をしよう。

第二部

'75年南アルプス 茶臼岳

上河内岳〜聖岳 正月行

昨年から続けた南アルプスを今年の正月も行なうこととした。

茶臼岳から聖岳への縦走だ。昨年は重荷に苦しめられたので今回は茶臼小屋には後藤さんが、聖平小屋には荻野が荷上に行くことにした。秋の休日に偵察山行を兼ねて登つたが、天気も良く紅葉のシーズン中の為に快調にすまることが出来た。本年の山行は余裕のある日程にしたので十二月二十八日に沼津を出発、大晩日には下山出来た。二十八日寮を車で出発、畑雑ダムから林道を一時間程歩きダムの大吊り橋を渡る(この吊り橋も前山行よりだいぶ板がはずれ、風が吹くと大きく揺れる。) 対岸よりちよつとした登りのヤレヤレ峠を越し上河内沢に入る。吊り橋や梯子を渡り二時間程歩くとウソコ小屋に着いた。今日は才一日目なので食料

は豪華なもので、焼肉を作ったが鉄板がないのでコッヘルのふたを使い、調味料がないので、下界で作るよううまく出来なかった。そして、たいして疲れていないのと同宿した他のパーティの物音が騒がしくて仲々、眠れなかった。翌日は茶臼小屋までで途中には横窪沢小屋があり、この小屋には今年の十月茶臼小屋の手前から雪も多くなってきたが昨年の千枚小屋程ではない。十一時小屋着、荷上げしておいた一斗缶を早速降ろして安心した。

一斗缶を開け昼食のラーメンを食べたがちょっとガソリン臭かった。残りの時間は荷物の整理、テントを張る等をしているうちに夕方になり、今晚と翌朝の食事の水を作り、夕食を食べラジオを聞いているうちに眠くなったので本格的に眠ってしまった。

三十日一時四十五分起床、四時出発、夜の底びえで雪が固く凍りアイゼンがキュ、キュと快ちよい、稜線分岐より茶臼岳往復頂上を目指し一直線にアイゼンの爪跡を着け頂上着四時四十五分、茶臼岳の頂上は大石の積み重ねの上にある。まだ薄暗いので周りの山々はまだ朝の眠りの中だ。ただこれから目指す上河内岳の偉容が目につく、上河内岳には二通りのルートがあり、我々は稜線通しに進む、昨日茶臼小屋に泊ったパーティが上河内岳にピストンをするので先に進みトレールを作ってくれてあった。竹内門の手前で歩きながらの日の出になった。ここで一本たてて日の出を見た。上河内岳の頂上にて先行パーティと再会、頂きは風が強立っているのも困難、指先の感覚もなくなる程の寒さなので風下に馬穴を掘り、荷物を置きピッケルを確実に突いて記念写真を撮る聖岳が大きく目前に迫る。上河内岳から聖平小屋に下る途中大学の山岳部らしい人達と行き合わせたが迫力満点の激しい登り方だ

った。ピークからピークに進むルートが秋に登った時はがしていた所が、雪の積もり方で雪尻が出ていたり、ふきだまりになっていたりして、全々偉う地形に変わった様になっていた。九時四十分聖平小屋着、小屋に入った。早速二階にしまっておいた荷上品を降ろした。冬山に入る者には冬山の荷上げ品を専門に荒す者もいるということなので一応小屋の持ち主には荷上げの許可を取ってあったが心配なのですぐに確認した訳である。昼食にラーメンを食べて外に出たが天気が悪化の方向なので聖岳に登るのは明日にする。小屋に泊っている登山者に小屋の前で写真を撮ってもらい（この写真は後で現象したら光が入っていて良くなかった。）近くを散歩して小屋に入る。雪をビニール袋につめ小屋に運び、水を作っているうちに暗くなってきた。今夜の食事は小屋に残って米を炊いて本格的山小屋風しいたけ御飯を大量に作り、腹一杯食べる事が出来た。夜中から夜半にかけて外は猛吹雪になった様子で風の音がビュービューと鳴いており、明日の好天を約束してくれる。三十一日、起床三時、出発四時四十五分、昨日の地吹雪でトレールが消えていると思ったが、この聖岳には聖沢等から入山してくる登山者が多いとみえ、トレールがかすかに残っていて割り合い楽なラッセルをするだけですんだ。小屋から一時間程歩くと日の出の時間なので風の当たらない所で一本たてることにして日の出の瞬間を写真に撮る。中腹からの日の出は前景の山が高いのでうまく撮れなかったが、やっぱり雪山の朝はすばらしい眺めだ。両側がスッパリ切り落ちている所で登行中の写真をとったが聖岳の左上に月が出ていて、夢の様な景色だ。頂上への一ピッチは急な斜面で夏はザクザクの岩くずの登りだが、今は南回なの

で雪も飛ばされ残った雪もとけて夜の寒さに固く凍りちよつとした氷壁を登るような感じで十二本アイゼンの出歯を使い直登する滑べると一直線に下の沢まで落ちて「即死だなあ」等と話しながら、頂上に着いた。頂上にはまだ人一人いなく私達だけだ、風が強く写真を撮る為に立ち止まっても、歩くのはフンパッテナければ飛ばされそうなくらい風だ。三千二十米の頂きからは赤石岳が見え、昨日登った上河内岳が真っ白な頭を突き出している。下の方からぼちぼち登行者が見え始めてきた。頂上の雪に名前を掘り、寒くてたまらないので早速降りることにする。下りは登りより難しく、慎重にかつ大胆にアイゼンをきかしてザックザックと快調に降りる。途中何人かの登山者と行き違いがナイフエッジ状の所では行き違うのが困難なのでしばしば待たされることになった。樹林帯を過ぎ一気に小屋までとぼす。九時十分着、テントを徹収して下山。聖沢を下る。秋に来た時は、一箇所切り断っている所があつてドライバーが困難になると思う所があつたが、無積雪期と積雪期の違いで雪崩による沢の埋没で、そんな箇所は見当らなかつた。途中の滝見台から見る聖岳南面に落ちてゐる大滝はすばらしい眺めだ。この聖沢ルートは尾根の腹を巻いて下つてゐるので行程が長く聖沢登山口に出るまで四時間程かかつた。この登山口から林道を歩くのだがこれほど厭な歩きはない。いつもの山行でも林道歩きにより足にマメができ、つぶれて痛い思いをしても歩かなければならないのだから、畑雑ダムに着く頃には暗くなりヘッドランプを点灯して車まで歩く畑雑ダム五時二十分着ここから車に乗り、昨年下山の帰りに泊つた赤石温泉ロッヂを指す。ロッヂでは昨年と同じ顔ぶれの従業員の人達がいたので、

話しもはずむ。温泉で汗を流しのんびりする。コタツに入り、ビールを飲む。本当にゴクラク、ゴクラク……。グウグウ……。

